

父の米寿祝い



大阪大学大学院医学系研究科
分子神経科学 荣誉教授 山下 俊英

私の両親は岡山の特別養護老人ホームに入所している。母は26年前に交通事故のため脳挫傷となり、意識不明の状態が続いた。その後、意識は回復したが、高次脳機能障害となった。短期の記憶や思考が障害されているため、介護が必要な状態が続いている。

父は自宅での介護を20年あまり続けたが、6年ほど前より認知症を発症した。母のおしめ交換の仕方がわからなくなり、自宅の廊下に立ち尽くす姿を見て、私は衝撃を受けた。

そのうち父は自分の身の回りのこともできなくなり、介護施設に入所することになった。症状は徐々に進行し、母以外の家族の顔も忘れ、今は快不快を表すごく簡単な言葉を発するだけだ。

一方、母は進行性の病気ではないので、この26年間症状は変わらない。最近の記憶が欠落しているため、時が止まったように中年の心のままである。挫傷を受けていない部分の脳は正常で、しっかりしたところと抜け落ちていところがまだら状に混在している。もともと人付き合いが好きなので、他の入所者の方の世話をしたりして、職員の方からは班長と呼ばれている。

今年の5月に父の米寿のお祝いをするためにホームを訪問した。私と妻はソファに腰掛け、両親はそれぞれ車椅子に座って向かい合った。

広いホールは整然としていて明るく、暖かい雰囲気で溢れている。持参した水ようかんと、職員の方が準備してくださったお茶をいただいて、

プレゼントの「米寿ベアー」のぬいぐるみと一緒に写真を撮るだけのさ
さやかなお祝いだった。

父は終始だらしないほどの笑顔で、時々「あー、あー」と声をあげてい
た。母が傍らにいてくれることが嬉しいのだ。父はもう私が誰だかわか
らないのだが、母のことはしっかり覚えていて、一緒にいるとこの
上なく幸福そうな表情を見せてくれる。

母の方はそれほどでもなく、大抵は用が終わるとさっさと去りたがる。
しかしその日は、母が父の手を握って、父を見つめて「おめでとう」と言っ
た。父はそれでさらに興奮して声をあげた。言葉にならない声をあげる
父に、母が「なんでそんな声をあげるの？」と窘めると声は止んだ。

母は何のお祝いなのか理解していないし、父は私たちが誰なのかも知ら
ないだろう。しかしその短くささやかなお祝いは、家族の心が通い合っ
た時間だった。



絵てがみ 鈴木 房枝 (8351)